

エッセイ

あれも見たい！これも撮りたい！～私の昆虫撮影記～
(その5 青い昆虫たち)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

私たちにとって特別な色はあるのだろうか。例えば花が本来持っていない色を、育種などにより作り出そうとするのは、バラで有名なように「青色」が多い。いにしえのころ、聖徳太子の定めた冠位十二階でも、紫に次いで高い位置にあるのは青であった。空や海の色のように、私たちの身近にありながらも、青は私たちにとって特別な意味を持つ色なのかもしれない…。

では昆虫の中で、青い色を持つもの、となると意外に少ない気がする。和名に「アオ」と付いていても、アオバセセリやアオスジアゲハなどのように、信号の青のように緑がかった色のものが多いので、純粋に青い昆虫は少ないように感じる。

そんななかで青い昆虫というと、まず浮かぶのはルリボシカミキリだろうか。青ではなく瑠璃色の和名をもつこのカミキリムシは、青色の斑紋を持ち、私にとっても子供のころから見たいと思っていた昆虫であった。しかしこのカミキリムシも、なぜか出会う機会がなく、長く会えないままであった。それが数年前に宿泊した山梨の宿に隣接した貯木場で、あっさりが見つかることができた(図-1)。これまでも貯木場があると毎回探していたのに見つかることができず、最近あまり期待していなかった。夕方の薄暗い貯木場に現れた個体は、ゆっくり歩き回りたくさん写真を撮らせてくれた。そして翅に浮かび上がるブルーの斑紋はなんとも幻想的であった。

チョウで青い種といえば、南西諸島にいるアオタテハモドキが思い浮かぶ。このチョウは、明るい芝地のよう

な場所があれば、たいていは見ることができるので、探すのに苦労することは少ないが、翅を広げて休んでいるオスを見つけると、ついつい時間を忘れて撮影してしまう(図-2)。珍しい種ではないものの、後翅の吸い込まれるような青い色が、このチョウのポイントを高くしているのではないだろうか。

でも青いチョウ、といえばモルフォチョウの輝きは圧倒的である。15年以上も前にブラジル南部の植物調査に同行した私は、林縁を飛ぶ青い輝きに目を奪われた。そしてすべてを投げ出し網だけ持って「モルフォだ」と叫んで森に消えた私を見て、同行した人たちは、もう森から戻ってこないのではと思ったそうである。その後網に入ったチョウを手に満面の笑みで興奮気味で戻ってきた私を、皆は半分呆れ顔で出迎えてくれた。捕まえたのはエガーモルフォという小型種だったが、飛んでいたチョウは実際の何倍にも大きく感じた。後にも先にも、こんなに「採集したい」と思った昆虫はこのチョウだけである。そして私の主義に反し、写真は残らず個体が標本箱に収まっている。

ノーベル賞に輝いた青色発光ダイオードは画期的な発見だが、「青」という神秘的な輝きがさらに賞に重みを与えている気がしてならない。青は人間の奥底の感情を呼び覚ます色なのではないだろうか…だから青い昆虫を見つけると心がときめき、いっそう印象に残るような気がする。



図-1 ルリボシカミキリ



図-2 アオタテハモドキ